
絵書き少女と夕暮れうさぎ。

羅夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絵書き少女と夕暮れうさぎ。

【Zマーク】

Z8019Z

【作者名】

羅夢

【あらすじ】

絵を描くことが好きな少女と、彼女の絵が好きな少女。

甘こよひな、甘くなこよひな、ほのぼのとしたお話です。

この小説は百合要素が含まれています。

プロローグ

放課後、一人きりの美術室。

美術室の窓で切り取られた小さな外の世界はもう口が傾きかけていて、部屋一面を鮮やかな橙色に染め上げている。

夕日は鮮やかでとても綺麗。

私は夕日によく見える位置にキャンバスと画材を並べていくと、瞬く間に絵の世界に吸い込まれていった。

キャンバスに自身の思いをぶつけて、私の心を絵にして映し出していく。

すると真っ白だったキャンバスは次第に赤や青や黄色や黒など様々な色で、夕日に見劣りしないくらいに鮮やかに色づいていった。私の心で描いていくような感覚が心地よくて、周りのことなど気にせずに一心不乱に筆を走らせていく。

さつきまで廊下から聞こえてきた話し声や足音はもう耳に入つてはこなくて、聞こえてくるのは筆を走らせる微かな音だけだった。

日が沈み暗くなつた外を一瞥すると、筆とパレットを机の上に置いた。

絵を描いている時はまるで魔法道具のように見えていたはずなのに、今は変哲もないただの筆とパレットに見えてしまうから不思議。急いで画材を片付け、ゆっくりと深呼吸をすると書き終わったことへの満足感や充実感などが新鮮な空気とともに体に染み渡つていく。吐く息はもうほんのりと白くて、冬はもう間近だと私に教えてくれるような気がした。

冬に入つて間もなく今年の初雪が降つた。

数年ぶりの雪に校内のあちこちで歓声があがつていいく。

雪のせいでテンションが上がつているのか、「雪合戦しようぜ!」とか「これなら雪だるま作れそうだねー!」とか、みんな小学生の頃に戻つたみたいで少し笑つてしまつ。

まあ、そう言う私も早く美術室で雪景色を描きたくて、そわそわしながら何度も何度も時計を確認してしまつていたから人のことは言えないんだけれど。

中々止まない雪はみんなを笑顔から不安げな表情に変えていった。雪は危険なほど降り積もり、みんな歓声の声は次第に不安げなものになつっていく。

本当は雪のために早く下校しなければならないことになつていたけれど、私の足は当初の意志と変わらず美術室に向かう。

初雪を、この大雪を描きたい。

たつたそのためだけに美術室へ向かう。

美術室に居るのが見つかつたら『それだけのために帰らないなんてお前は馬鹿なのか?』なんて、くだらない小言を言つ先生はきっと……いや確実に居るだろう。

最悪の場合、美術室まで押しかけて無理やり帰らせてくるかもしない。

だけどそんなことは気にしない。

『それだけ』で片付けてしまえばそれで終わりになつてしまつ。

けれど私は数十年に一度程度のこの大雪を『それだけ』で片付けたくはないし、片付ける気も全くなかった。

頭の中で描きたいことや、構図がどんどん決まつていいく。

周りの不安げなどんよりとした雰囲気とは違い、私は楽しげな軽い足取りで美術室に向かう。

美術室の扉の前で一瞬、鍵かかかっているかもしないという不安が頭を横切つたけれど、幸いなことに鍵をかけ忘れたらしく扉はいつものようにがらっと低い音を立てながら開いた。
いつもと同じように、窓のそばにキャンバスを置くと急いで画材を出す。

描き終わるまでは見つかるわけにはいかない。
急ぎつつも音を立てないように寧に静かに準備をしていく。

使う色はクリーム色や、水色などのパステルカラーと暗い紺色。
初雪の嬉しさと、大雪に対する恐怖の色。

いつもはもつと激しくて暗い絵ばかりだから、正直こんなにほんわかとした絵を描けるのか少し不安になってしまつ。
けれどよくよとしている暇なんてないので、急いで下書きを描いていく。

描き始めていくと、描くまでの不安が嘘のように消えて、薄桃色・クリーム色・紺色と可愛らしくカラフルになっていく。
あれだけ不安だったほんわかした絵はどんどん完成に近づいていくけれど、全く満足出来なかつた。

大雪に対する恐怖、上手く表現出来ない。

何色にしよう?

見つからないうちに描き上げなければいけないと焦るばかりで、何もいい色が思いつかない。

ゆっくり深呼吸して、落ち着いてから考えなおす。

私の手は10分以上も絵の具のケースの上をさまよっているが、いい色はどうしても見つからない。

まだ未練は残つていたけれど、このまま悩んでいても描ける気はしなかつたから、片づけのためゆっくりとキャンバスに手をかけた瞬

間、急に後ろから声が聞こえた。

少し慌て氣味に後ろを振り向くと、そこに面たのは栗色のふわっとした髪の小柄な少女。

「灰色、とかどうですか…？」

聞き取るのが大変なほどとも小さこ声だったけれど、少女の透き通つた綺麗なな声のおかげできちんと聞き取れた。
一瞬天使様じやないかなと勘違にしてしまつほど、可愛らしくて綺麗な声。

「あ、あの…。」

「えつ…。」

話し始めようとすると、タイミング悪く相手の声と重なつてしまつ。

「あ、あの。先に、じつ。」

『お先』じつ。』と言おうとしたが、お言葉に甘えて『今は先に話しあうことにある。

先にじつ、なんて話しあじめる順番を押し付けあつている時間も無駄だし。

「ありがと。こきなりだけど…名前聞いてもいいかな？」

まあ一番の理由は相手名前を知らないと話しじるんじゃない、そう思つたから。

彼女ははつとした顔をしていきなり慌てて話しだした。

はつとして顔を上げた時にちらりと見えた少女の顔は多少幼く見え

るもののかわいらしく、まさに天使だった。

「1年E組、天原桃花です。」

言い終わると照れたように頬を桃色に染めながら微笑みかけてくる。うわ、可愛い。

目の前で微笑んでいる彼女は、女の私でも思わずじつと見つめてしまつほど可愛らしくて魅力的だった。

「先輩は2年の蒼原青華先輩ですよね？」

「え……ああ、そうだけど……。」

あれ、天原さんは今日で初対面なはずなのに、なんで私の名前なんか知ってるんだろう。きょとんとしている私を見て、天原さんはくすりと笑つて答えを教えてくれた。

「実は私、ここずっと蒼原先輩のこと見てたんですよ。えーっと…確か秋からです。」

ずっとここから見てたって…要は……。

「天原さんは…ストーカー…なの？」

いきなりこの質問をするのはちょっと失礼だったかな、なんて思いつつも遠慮なしに聞いてみる。

天原さんは一瞬さつきの私みたいにきょとんとした顔をしてから、両手を振りながら慌てて答え始めた。

「えつ？スツ、ストーカーではないと……あ、いやストーカー……です。」

ストーカーであることを自ら認めてしょぼんと肩を落とす天原さん。なんか、天原さんって面白い。

ストーカーされるのは普通は嫌なはずなのに、目の前でしょぼんと肩を落としている天原さんへの嫌悪感は全く無くて、むしろ可愛らしくて面白い魅力的で素敵な子だとすら思ってしまいます。

「先輩。続き描かないんですか？」

つぶらな瞳をきらきらと美しく輝かせながら聞いてくる。可愛らしい瞳に小柄な体躯にふわふわとした髪……彼女は小学校の頃に飼っていた人懐っこいうさぎにそっくりだった。天原さんのことは心の中ではうさぎちゃんと呼ぼうかな。

「先輩の絵の続きを、見たいです。」

うさぎちゃんと飼っていたうさぎのことを考えてぼーっとしている私の顔を覗き込んでそう言つた。はつ、いけないいけない。

昔からマイペースでのんびりと考え方ばかりしてしまつ悪い癖はまだ直つていないうだつた。

「……ああ、折角教えて貰つたし描こいつかな。」

灰色の絵の具をパレットに出し、濃さを調節していく。

濃いめの灰色から薄め灰色まで僅かな違いをつけたものをいくつか作ると、筆に絵の具をつけてキャンバスに向かつ。

さつきまで描けないと諦めていたのが嘘のようで、筆はキャンバス

の上を駆け回つていいく。

「わあ！」とか「素敵……。」とかつざきちゃんが呟く声が何故か嬉しくて、筆がキャンバスを走つていいくスピードはいつもより各段に速い。

「これで完成……、かな。」

出来上がった絵を見ると今まで賞を取つたどんな絵とも比べ物にならないほど上手に描けていて、思わず胸の前でガツッポーズをしました。

天原さんも私の自信作を氣に入ってくれたようで、目を大きく見開いて「すごい……。」と言つた後、にこにこと可愛らしく微笑みながらずっと拍手をしてくれていた。

今季の中　いや、今までで一番の傑作だらう。
これならコンクールに出したら金賞でも狙えるだらう。
だけど、私はその絵をつさぎちゃんと差し出した。
幸いキャンバスは部屋に飾ることができるくらいのサイズ。
断られたらどうしようと不安が頭をかすめたが、彼女はいいんですか？！と言つと、私の手からキャンバスを受け取り、嬉しそうに笑つてくれた。

暖房もつけていない美術室は寒いはずなのに、不思議と寒さは感じず、とても暖かく感じた。

雪（後書き）

12／29～1／4は帰省のため更新できないと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8019z/>

絵描き少女と夕暮れうさぎ。

2011年12月28日21時50分発行